

Ovarian high-grade serous carcinoma with a noninvasive growth pattern simulating a serous borderline tumor

今村, 紘子

<https://hdl.handle.net/2324/1654714>

---

出版情報：九州大学, 2015, 博士（医学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



KYUSHU UNIVERSITY

氏名：今村 紘子

論文名：Ovarian high-grade serous carcinoma with a noninvasive growth pattern simulating a serous borderline tumor

(卵巣漿液性境界悪性腫瘍に類似した非浸潤性増殖様式を示す卵巣高悪性度漿液性腫瘍)

区分：甲

### 論文内容の要旨

卵巣漿液性境界悪性腫瘍(以下、SBT)は低悪性度漿液性腺癌の前駆病変で、形態学的には非浸潤性の増殖様式と低異型度の核異型が特徴的である。一方で、多くの病理医たちは、高異型度の核異型を示すが弱拡大で境界悪性腫瘍のような非浸潤性増殖(以下、HG-noninv)を示す卵巣漿液性腫瘍を、経験的に通常の高悪性度漿液性腺癌(以下、HGSC)であるとみなしている。しかしながら、このような腫瘍の分子生物学的特徴は確立していない。そこで今回、我々はその分子生物学的証拠を明らかにすることを試みた。我々は、高異型度で非浸潤性増殖様式(HG-noninv)を示す卵巣漿液性腫瘍 37 例、そのうち 36 例は典型的な浸潤を伴った HGSC 成分(以下、HG-inv)と共に存した腫瘍(以下、HGSC with HG-noninv)、1 例は完全に HG-noninv のみから成る腫瘍(以下、pure HG-noninv)を用いて検討を行った。組織学的には、全ての HG-noninv で高い核分裂活性を認め、3 例の HG-noninv を有する腫瘍に漿液性卵管上皮内癌を認めた。免疫組織化学染色では、HG-noninv のほとんどにおいて p53 異常発現が見られ、多くにおいて IMP3 高発現、p16 過剰発現、MIB-1 高標識率、PAX2 低発現が見られた。分子生物学的には、pure HG-noninv、13 例の HGSC with HG-noninv で TP53 遺伝子変異を認めたが、KRAS/BRAF 遺伝子変異を認めるものは一例もなかった。レーザーマイクロダイセクション法を用いて、1 例に HG-noninv と HG-inv で同一の TP53 遺伝子変異を検出した。HG-noninv の免疫組織化学的、分子生物学的特徴は典型的な浸潤性 HGSC に類似し、SBT のものとは異なっていた。以上より、SBT に類似した細胞学的に高異型度な HG-noninv の増殖様式は、真の SBT ではなく HGSC の形態学的スペクトラムに含まれると結論付けられる。